

Karl Menger の思想に関するノート
—オーストリア学派とウィーン学団のはざままで—
A Note on the Thought of Karl Menger :
Between the Austrian Economics and the Vienna Circle

中山 智香子
NAKAYAMA Chikako

一橋大学社会科学古典資料センターから2000年7月に、オーストリア学派の始祖カール・メンガー (Carl Menger) に何らかの形で関わるテーマで話をするよう、依頼をいただいた。このとき、Karl Menger, すなわちその息子である数学者兼経済学者をテーマにさせていただこうと比較的すぐに決めたのには、二つの理由がある。一つには、ウィーンで1997年夏からおおよそ3年にわたって展開され、当時ちょうどその最終段階にきていたプロジェクト「自由主義と論理実証主義：オーストリア学派とウィーン学団の関係」において、わたくしが主に Karl Menger の経済思想を担当させていただいたからである。その成果と共に、プロジェクトそのものについても、感謝の気持ちをこめ、いつか日本で機会を見つけて紹介したいと、かねてより考えていた。もう一つには、まさにその成果だが、彼の思想が昨今、主に経済学史の分野でしばしば扱われるようになってきた一方、その学際的な性質のためか、どうも既成のパラダイムの枠組になじまない居心地の悪さがあり、これを一度、より広い文脈から整理しておきたかったからである¹。こうしてテーマを快くご了承いただき、「Karl Menger と経済思想 —ウィーンのプロジェクトに参加して—」として報告させていただいた。ここでは多少の論点整理を試みてみたい。

1. プロジェクト「自由主義と論理実証主義：オーストリア学派経済学とウィーン学団の関係」

まず、先に述べたプロジェクトについて、少し紹介させていただくことにする。それはウィーン学団研究所の所長でありウィーン大学でも教鞭をとる Friedrich Stadler 氏と同大学のゲーデル研究の専門家 Eckhart Köhler 氏が中心となってプランされたものだが²、その少し前である90年代の前半、ウィーン大学で「オーストリア学派とゲーム理論」をテーマに博士論文²を準備していた私は、しばしば同研究所に出入りし、草稿を見ていただいたり、アドバイスをいただいたりしていた。そもそもこの研究所は1991年に Stadler 氏のイニシアチブで設立されたものだが、大戦間期に活躍したいわゆるウィーン学団の方針、すなわち学際的かつ大学の垣根に縛られず、自由な知的交流をめざすという方針ののっとり³、私のような一介の留学生にもいつも

¹ なお、プロジェクトの成果は論文集“Liberalismus und Logische Positivismus” (仮題) の中に‘An Investigation of Intellectual Freedom in one Member of Vienna’s ‘Floating Intelligentsia’: The Economic Thought of Karl Menger in Connection with the Austrian School of Economics’ として刊行予定である。

² 1995年5月にウィーン大学大学院経済学研究科に、‘The “Theory of Games and Economic Behavior” in the Context of the Austrian School of Economics and of Contemporary Game Theoretical Problem’ と題して提出した。またその一部分を論文にしたのが、Nakayama [1997] である。

親切に門戸を開いてくださったのである。謹呈してあった私の拙い博士論文に興味をもってくださり、プロジェクトのテーマに深く関わるからといって、メンバーにいただいたのも両氏のおかげである。私は役不足を痛感しつつも、電子メールのやり取り等でプロジェクトの構想に加わらせていただいた。やがてウィーン大学経済学部の Milford, Rosner 両氏と元同学部のスタッフだった Puppe 氏の賛同を得て、またオーストリア国立銀行からの財政援助を受け、プロジェクトは始動した。もっとも Puppe 氏と私はすでにウィーンから離れていたため、メールでのやり取りの他は年に数回の打ち合わせ会議への参加、また海外からテーマに関わるゲスト研究者の連続講演会のプランと参加が、その実質となった。

ここで、同プロジェクトのプラン（原文はドイツ語）を試訳してみたい。プロジェクトを立ち上げた当初、メンバーが共有していた問題意識がよく表れているからである。

「両大戦間期のオーストリアには二つの学問の方向性があったが、それらは今日まで世界的に影響力をもつことで知られており、オーストリアの精神史の中でも指折りの意義深い流れである。ひとつは、哲学と科学史におけるウィーン学団であり、もうひとつは社会科学、経済学におけるオーストリア学派である。両学派とも、ここ数十年にわたり歴史的に研究されてきたが、これまで両者を同時に分析し、その共通点と相違点、お互いの影響関係について研究したものはなかった。

どちらもオーストリアに典型的であり、また例外的であるといえる。両者ともにオーストリアの晩期啓蒙期、すなわちフランスや特にイギリス、スコットランドに発し、オーストリアにおいては19世紀の後半に、社会の上層階層によって広められたものを代表している、という意味では典型的である。しかし両グループとも、保守的な反啓蒙の立場の強い圧力の下にあり、結局1934年からのオーストロ・ファシズムや、1938年からの国家社会主義のカオスを逃れて、立ち去らなければならなかった。その意味では当時のオーストリアの思想的文脈においては、むしろ例外的であったといわなければならない。とはいえ、やがてこの両グループの思想や基本原理のほうはずっと示唆に富み、優れていることが明らかになったのだが。

さて、ここで上記二つのグループを、互いに関連する学問現象として研究することを提案したい。これまで知られていなかったか、または評価されなかった両者の発展や相互の影響関係に関する資料を掘り起こし、また特に両者の基本的なスタンスや問題関心を明らかにする。もちろんこのようなテーマは壮大であり、限られた時間内で研究し尽くすことはできないが、これを研究の出発点としたいと考えている。

歴史的な局面

オーストリア学派経済学についても、ウィーン学団についても、これまでにすでにさまざまな歴史研究があり、それを単にくり返す必要はない。プロジェクトのメンバーは、特に相互の関わりと影響関係に関する新しい見方を示したいと考えている。例えば、ハイエクがオットー・ノイラートと対立したことはよく知られているが、ここからハイエクは、カール・ポパーを

³ これまでに同研究所の主催で行われたシンポジウムや所蔵図書からみても、たとえば亡命、オーストロ・ファシズム研究、科学史・科学哲学研究（ポパー、ゴムペルツ、ラカトシュ、ファイヤアーベント等）など、きわめて多彩である。

ウィーン学団の批判者として奨励することになった。しかし、たとえばヨゼフ・ポパーからウィーン学団の「組織者」オットー・ノイラートへ引き継がれた「社会工学」の伝統に対し、ルードヴィヒ・フォン・ミーゼスがいかにして、より広く全ての「共同経済」を根本的に拒絶するに至ったのか、というような、もっと研究の立ち遅れた問題は、さらに興味深い。ミーゼスの同書（『共同経済』）は、オーストリア学派の経済学が自由主義的発展をとげた際に、鍵になる本だったと私たちはみている。（テーマ的にも内容的にも、後に広く普及したハイエクの『隷従の道』よりもずっと重要である。）この点に関して、最近モスクワで発見されたミーゼスの「失われた遺稿」はおそらく、20年代のウィーンの経済学者と哲学者の相互交流を明らかにするために、非常に重要なものとなるだろう。

しかし理論経済学の発展に関しては、ウィーン学団が数学や論理の基礎に関心を抱いていたことが重要な意味をもっている。このような横の関係性については、これまでほとんど注意を向けられることがなかったが、経済学の発展にとって、非常に大きな意味をもっている。というのは、フォン・ノイマンの「拡大経済の理論」も、フォン・ノイマンとモルゲンシュテルンのゲーム理論も、いずれも数学の厳密な方法によって、それまで予想もつかなかったような理論的洞察が可能になった例だからである。ここで非常に重要な仲介の役割を果たし、また共同研究者としても意味を持つのが、カール・メンガーである。彼はオーストリア学派経済学の創始者カール・メンガーの息子であり、ウィーンの数学者ハンス・ハーンの弟子であり、彼自身ウィーン学団の一員であった。（しかしカール・メンガーの息子が自ら、オーストリア学派経済学がもともと数学的応用に欠けていたのを修正しようとしたとは、ほんとうに皮肉なことである。）

体系的な局面

双方のグループにとって、合理的理論の性質や問題設定が中心課題であった。いずれも、特に19世紀の自然科学の新たな成果によって、強く影響を受けていた。経験的方法論の意味と基礎は、どちらのグループにとっても問題外であった。しかしウィーン学団にとって大きな謎だったのは、数学をいかに解釈し、基礎付けるかであった。シュリック、メンガー、クラフトのいくつかの主要著作以外には、数学の解釈と基礎に対応した倫理の解釈と基礎について、これまでほとんどかえりみられることがなかった。倫理と数学の扱いはしばしば似たもの、あるいは同じと考えられるにも関わらずである。オーストリア学派の経済学にとっての大きな問題は、経済理論や社会理論の解釈と基礎付けをすることであった。すなわち、測定が十分に可能でなく、それを保証されないような理論的前提は、どこまで可能で、どこまで用いられることができるのか。また諸理論はそもそも規範となりうるのかどうか？など。そこで、双方のグループにとっての中心の問題は、「合理性の理論」を打ち立てることであった。

今日に至るまであまり実質的な前進はない。さまざまな研究者、特にノーベル経済学賞受賞者であるハーバート・サイモンやジョン・ハサニー、ラインハルト・ゼルテンらが強調するように、経験的（記述的）行動理論も規範的（合理的）行動理論も可能であり、また必要なのである。しかし、規範的理論がいかにして解釈され、正当化されるべきかについては、明確でない。この点でウィーン学団には見るべきところがある。一特にウィーン学団が貢献した成果として重要なのは、経験科学における理論的概念の役割の分析（カルナップ）である。その解明にとって鍵となるのは主に、適切な専門家の評価という助けを得て規範は正当化されるという前提である。

最後に、社会理論のある根本問題が説明されなければならない。それは社会理論全体にとっての主要問題であったものだ。すなわち個人と社会の相互作用についてである。ここではまさにゲーム理論が役に立つ。なぜならゲーム理論は、一方で個人が自らについて、たとえば自分が何を求め、何をなすことができるかを完全にわかっているという前提をおき、他方でまた同時に、そのような個人から成る集団にできる全てのことを投影するからである。しかし諸集団は諸提携集団に分断されうるし、その諸集団が今度はまた、ほとんど「諸個人」として扱われたりする。ちょうど諸集団がさまざまな種類の「諸個人」から成るのと同じように、個人自体も集団として扱われることができるのである。ところでそれは人工知能の開拓者のひとりであるマーヴィン・ミンスキーの把握である。つまりそれは、個人の概念をそもそも相対化することにほとんど等しい。なぜならそこでは個人が明らかにさまざまな次元で構成されうるからである。ここでは哲学、情報科学、認知科学などの文献から、知識と行動主体（Aktuer）の概念が検討されなければならない。

プロジェクトのメンバーは、自由主義の信奉者の多く、特に個々人の根本的自由を謳う代表者たち（ハイエク、フリードマン、ブキャナン）が、そのような「相対化」に反対するであろうことを知っている。というのは、彼等の主張する絶対的自由すらも、そこでは相対化されてしまうからである。しかし私たちは、この問題の概念による解明が、自由主義者にとっても、コミュニタリアニズム（協同主義）信奉者にとっても、非常に実り豊かな理論的結果をもたらすであろうと考えている。」

若干の説明を加えると、Stadler氏はすでに両大戦間期のウィーンの歴史的・哲学的文脈からウィーン学団を研究していたので⁴、この蓄積を基に経済学の流れを理論的かつ思想史的に結びつけることが、主な関心であった。特に分析対象・分析単位である個々の主体という概念を、従来のオーストリア学派的な方法的個人主義で考えられていた「個人」と比較しつつ、より広い概念、すなわち情報を媒介にして開かれた個人の概念を検討することによって、広い社会理論の可能性を探り、さらには晩期啓蒙期に表れた社会的合理性の概念を展望するのが、プロジェクトの目的であった。

そして私の仮説は、合理性という概念を軸にすると Karl Menger（以下、メンガーと略記）の思想の一貫性をみることができるというものであった。これを以下でみておきたい。

2. カール・メンガーの思想

2.1. 思想の方向性 一狭義の合理性を批判する一

メンガーは一方でウィーン学団の一員として概念や言語の意味、意味作用を再検討し、他方で公理体系によって経済理論、あるいはより広く社会理論を再編する意図をもっていた。それらは一つの主張が形を変えて表れたものである。メンガーは1928年から、自ら中心となって「数学的コロキウム」を開催するが、それはオットー・ノイラートらが自然科学の手法によって諸科学を統一するべく打ち出した、「統一科学」プログラムに対する反対表明であった。彼はノイラートのもっていた「合理性」への決定的信頼感⁵を共有できなかったのである。こうしてメンガーは、およそ第一次大戦後、とくに1924年以降、ウィーン大学自然哲学科を中心とし、ヴィトゲンシュタインの『論考』にアイディアを得ようとする非公式な集いとして集まったシュ

⁴ Stadler [1987/88], [1997], Stadler and Weibel (ed.) [1995] など

リック、ハーン、ノイラート、カウフマン、ヴァイスマン、ファイグル、カルナップらのメンパー⁶から、袂を分かつことになった。

メンガーの数学的コロキウムにはゲーデル等の数学者ばかりでなく、海外からのゲストも含め、経済学者や統計学者など、多彩な人材が集まり、狭義の学問領域を越えた議論を活発に行った⁷。それは、メンガーの思想が内在的にもつ合理性への批判的スタンス、価値の多元主義に対応している。ところでこの多元主義は、特に彼がアメリカへ亡命してから第二次大戦後に、教育的要請に応じて書いた諸論文にはっきりとみることができる。

メンガーはたとえば、「オッカムの法則の反対側」に関する論文を書いた。それはとくに目的・手段という意味での合理性が求める判断基準であるオッカムの節約法則、すなわち「少しで済ませられるところに、多くを投入しても仕方がない」という考え方を論じたものである。果たして人間の知はそのような方向で思考を行うものであろうか。また学童用の知能テストでは、たとえばいくつかの要素が提示され、そのなかで「仲間はずれ」すなわちカテゴリーの異なるものを、なるべく迅速に選び出すことが要求される。あるいは、ヴィトゲンシュタインの『哲学探究』を想起させる数列の問題、「次に来る数は何ですか？」でも、出題者の考えた数列の法則性をなるべく素早く見つけ出し、 n 番目の値を計算することが「正解」となる。そして、より多くの正解を得た学童が「知能が高い」という評価を得るのである。しかしこれが本当に人間の知能を測る基準となるのだろうか。これらがメンガーの問題提起である。

答えは否である。メンガーは知能テストにおいて「テストされる側は、そのテストの発案者がたまたま考えついたことが何かを当てるよう、期待され、要求されているに過ぎない」⁸と述べ、それが社会的な推理力を測るものではありえても、知能とはまったく関係ないと結論している。知能テストにおける正解は、最も時間節約的であるに過ぎないのである。人間の知の豊かさはむしろ逆に、「多くを投入できるところを少しで済ませても仕方がない」という方向、すなわちオッカムの節約法則と逆方向にある。こうしてメンガーは、目的・手段の節約的（エコノミーな）合理性を批判する。そして多様な「合理」性すなわち理にかなった性質や、多様な論理を許容する言語を志向したのである⁹。

したがってまさに経済学の分野でも、単なる節約という意味での *economy* や、それを生み出すもととなる資源の希少性を理論の基礎とするのではなく、もっと幅広い意味での *economy* = 経済、あるいはより一般的な市場の概念を考えていくことが必要となる。しかしメンガーは手がかりの第一歩として、目的・手段の合理性という狭い枠組の中で構築できる理論を明確化し、同時にその理論の限界を述べるあり方を求めた。前者は公理による経済理論体系の構築であり、後者は「メタ理論」である。彼はこれらを中核部分としつつ、より一般的な「合理的」、すなわち理にかなった価値判断や意思決定のプロセスを包摂する社会理論を考えたのである¹⁰。そこで

⁵ ノイラートは合理性がむしろ人間的であり、社会に幸福をもたらすと考えている。これについては Nakayama [2001] で、ハイエクとの比較から論じた。

⁶ Stadler[1997] の整理による。

⁷ 博士論文ではコロキウムのテーマを時代順に整理したリストを付録として載せたが、やがてコロキウムの機関紙であった *Ergebnisse* 自体が復刊されるに至った。(Menger [1998])

⁸ Menger [1953/ 1979]

⁹ ちょうどそれは、ヴィトゲンシュタインが『論考』における公理の構築と破壊という立場から、『探究』の多元的立場に移行したのと似ている。

¹⁰ 比較的早い時期に提示された、その試みが Menger [1934/ 1974] である。

は主体が多様な選択（肢）を考慮でき、そのため他の主体が何を知っており、何を常識として
いるかを推量する必要が生じてくる。したがって社会理論の中心概念は、合理性から倫理性の
領域へとシフトするのである¹¹。

ところで上記に述べたようなメンガーの考え方は、アメリカ亡命後に初めて構想されたので
はない。むしろ彼が学問的基礎を築くに至った 1920 年代の初頭に、すでにその起源が見出され
る。彼は、父 Carl Menger の遺稿を整理する中でこのような見方を獲得したというのが私の仮
説である。整理された遺稿は『経済学原理』第二版として出版された（1923 年）。そこには、
「欲求」概念と、より広義の市場概念の検討をふまえて、広義の「経済」概念が論じられてい
る。それはメンガー自身の意向を反映した編集となっている。父 Carl Menger が生涯をかけて
主著を改訂し続けたなかで構想した経済と社会の一般理論は、こうしてメンガーに受け継がれ
たのである。しかしそれは単なる継承ではない。彼自身の構想した社会理論は、30 年代半ばに
刊行された著作¹²のなかにみられるが、そこではカントの道徳律、「常に、一般法則になりうる
ような基準に従って行動せよ」の検討が冒頭に置かれ、その基準がひと通りではなく、むしろ
個人の道徳的選択によることが確認されているからである。これらは上記に論じた合理性の多
元主義から考えれば明らかな方向性であるが、他方、人間や経済主体の行動の観察によって一
般的、普遍的法則性が得られるという「本質主義」から、のりこえが図られているともいえる。
この本質主義とは、父 Carl Menger がシュモラーとの間に行った方法論争において、堅持した
立場である。つまりメンガーは父の方向性を批判的に継承したのである。

2.2. オーストリア学派経済学との距離

前節で述べた Carl Menger からの批判的継承関係は一見すると、メンガーが紛れもなくオー
ストリア学派の経済学の文脈で語られ得ることを示しているようである。しかしそれはむしろ、
当時オーストリア学派を代表していたミーゼスやハイエクの立場から、逸脱する方向性であっ
た。そもそもメンガーのように公理という数学的手法に基づいて経済理論を構築すること自体、
従来のオーストリア学派経済学とは異なる方法であった¹³。メンガーが打ち出した合理性の多元
主義は、従来の領域をさらに根本的に越境するラディカルさを備えていた。

メンガーによる経済理論の論考は実質的に二本の論文だけであり¹⁴、直接ハイエクやミーゼス
の理論との距離を検討するには不十分である。しかし父メンガーの Menger Papers¹⁵ のなかに収
められたメンガー自身の書簡などに、多少の資料を見出すことができる。例えばハイエクとの
間では、まさに父メンガーの『経済学原理』の初版と第二版のいずれを評価するかという点で
対立した。ハイエクはメンガーの編集した第二版を断片的であるとしてメンガー全集への採用
を否定したのである¹⁶。書簡には、メンガー全集の計画、出版社の相談などでメンガーがハイエ

¹¹ 本稿第一章に示したプロジェクトのプランのなかで「数学と倫理」と述べられる問題意識の方向性は、
このようなものである。

¹² Menger [1934/ 1974]

¹³ 上記のプロジェクト・プランでもこれを指摘している。

¹⁴ 一つは経済学におけるリスク（彼自身は不確実性と呼ぶが）の扱いを論じたもの（Menger [1934/
1979]）、もう一つは収穫逓減の法則をメタ経済学的に検討したもの（Menger [1936/ 1979]）である。

¹⁵ The Papers of Carl Menger, 1840 - 1921 from the William R Perkins Library, Duke University, Part 2, Reel
32: Correspondence, Karl Menger 1914 - 1985。もともとはデューク大学のライブラリ所蔵であるが、慶
応大学にマイクロフィルムのコピーがあるので、筆者はこれを利用していただいた。

クに協力している様子が明らかだが、第二版を採用しないと決定した書簡では、むしろ全集全体の分量の問題として述べられている。ハイエクもメンガーとの表立った対立を避けたかったのかもしれない。

ミーゼスとの対立は、もう少し明らかである。ミーゼスがメンガーに宛てた手紙の中で、両者の方向性の違いについて「書面で書くのは好ましくない。むしろ会って議論したい」と述べているからである¹⁷。したがってその具体的な内容は記されていない。ただ、社会主義計算論争においてオーストリア学派の立場を主張したミーゼスが、価格決定の「合理的」基準として市場の働きを主張したことを考えれば¹⁸、彼が従来どおりの合理性概念に依拠しなければならなかったことはわかりやすい。

こうしてメンガーは、30年代のオーストリア学派にとってはむしろ傍流ともいえる立場を代表した。しかしこのようなビジョンや方法論にオスカー・モルゲンシュテルンが大いに賛同し、やがてフォン・ノイマンとともにゲームの理論を誕生させていったことを重視するならば、メンガーの果たした役割は高く評価されなければならない。それは価格闘争、とくに均衡に収束しないそれや交渉問題、さらには限定合理性にもとづいたモデル等こそが、一般均衡理論に包摂され得ないオーストリア学派の独自性であると考えられる場合に対応している。換言すれば、オーストリア学派の経済学の特徴をどの局面でとらえるかによって、メンガーの評価は異なってくるのである。論証不可能を承知で比喩的というなら、メンガーの思想の開くラディカルさはオーストリア学派という土台すらも揺るがし、オーストリア学派の内部に拒絶の方向を生み出したといえるのではないだろうか¹⁹。

3. メンガーの思想の意味

以上、ウィーン学団とオーストリア学派経済学のはざまに位置したメンガーの思想の意味を考えた。それが示唆するラディカルな多元主義は、今日なお有効性をもつだろう。彼自身はすでに30年代に、「道徳的信念やその条件を記述するのに、歴史的あるいは民族誌学的にしかできない」と考えるのはまちがっており、むしろさまざまな合理性に関する一般理論においてこそ、それがもつバイアスを組み込んだ形でひとつの信念・倫理を論じることができると考えたが²⁰、それは今日にも通じる問題関心である。メンガーは、大学という知の制度から距離を保ち、言語学、論理学、数学、経済学その他を越境する学際的な方向性を模索し、亡命・移民し

¹⁶ „Sehr viel mehr blieb jedoch in der form umfangreicher, aber fragmentarischer und ungeordneter Manuskripte... Für den Augenblick jedenfalls müssen Mengers Arbeiten aus seinen späteren Jahren als verloren angesehen werden.“ (Hayek [1933], S. XXXI)

¹⁷ ‚Über die Verschiedenheit in der Auffassung der methodologischen Fragen möchte ich mich nicht gerne schriftlich äußern. Auch Sie haben Ihren Widerspruch gegen meine Ausführungen mehr angedeutet als auseinandergesetzt. Ich glaube, diese Dinge müssen einer mündlichen Aussprache vorbehalten bleiben. Ich freue mich schon darauf, mich Ihnen gelegentlich... diskutieren zu können‘ (ミーゼスからメンガーへ、ジュネーヴ、1935年11月30日付)

¹⁸ Mises [1922/1996], [1949] など。

¹⁹ しばしば語られるエピソードとして、メンガーが1927年にリスクの問題を扱った報告を行ったとき、オーストリア学派の人々が拒絶反応を起こした、というものがある。メンガー自身が同報告をまとめた論文の前にエピソードとして紹介している。(Menger [1934/ 1979])

²⁰ Menger [1934/1974]

た新天地でも活躍し、狭い「オーストリア性」から自由な立場を生きた。ウィーン学団とオーストリア学派の双方をのり越えながらも、両者の理想を徹底的に追い続けたという意味では、彼の思想は紛れもなく両者の生み出した独自の産物であったといえるだろう。

追・ところでウィーン学団研究所長 Stadler 氏の主著, [1997] *Ursprung, Entwicklung und Wirkung des Logischen Empirismus im Kontext*, Studien zum Wiener Kreis, Surkamp の邦訳の企画があるが(英訳は2000年に刊行された), 目下出版社探して停滞している。何かよい情報をお持ちの方には、ご一報いただければ幸いである。

参考文献

Asada, A.

-[1982] 「功利主義的経済学の誕生」(人文学報, pp. 1-21)

Friedmann, M. and Savage, L. J.

-[1948] The utility analysis of choices involving risk, *The Journal of Political Economy*, Vol. LVI, pp. 279-304.

-[1952] The expected-utility hypothesis and the measurability of utility, *The Journal of Political Economy*, Vol. LX, pp.463 - 474.

Hagemann, H. (ed.)

-[1997] *Zur deutschsprachigen wirtschaftswissenschaftlichen Emigration nach 1933*, Metropolis-Verlag

Hayek, F. A. von.

-[1933] Introduction, in Menger, C. [1871/1968]

Ingrao and Israel

-[1990], *The Invisible Hand; Economic equilibrium in the history of science*, (transl. from Italian by McGilvray, I.), Massachusetts.

Keizer, W.

-[1991] Two forgotten articles by Ludwig von Mises on the rationality of socialist economic calculation, *The Review of Austrian Economics* 1.

Kuhn, H. W. and Tucker, A. W.

-[1958] John von Neumann's work in the theory of games and mathematical economics, *Bulletin of the American Mathematical Society* 64, pp. 100-122.

Leonard, R. J.

-[1994] Reason, Ethics and Rigour; Morgenstern, Menger, and Mathematical Economics, 1928-1944, *Cahiers de Recherche*.

-[1995] From Parlor Games to Social Science: von Neumann, Morgenstern, and the Creation of Game Theory 1928 -1944, *Journal of Economic Literature*, vol. 33, pp. 730 - 761.

-[1997] Value, sign, and social structure: the 'game' metaphor and modern social science, *the European Journal of the History of Economic Thought* 4:2, Summer, pp. 299 - 326.

-[1998] Ethics and the Excluded Middle; Karl Menger and Social Science in Interwar Vienna, *Isis* 89; pp. 1- 26.

Menger, C.

-[1871/1968] *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, die erste Auflage, J. C. B. Mohr, Tübingen.

-[1923] *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Menger, K.(ed),die zweite Auflage, Hölder-Pichter-Tempsky A.G, Wien.

Menger, Karl

-[1934/1974] *Morality, decision and social organization*, Vienna Circle Collection 6, Dordrecht-Holland/

- Boston-U.S.A, D. Reidel Publishing Company (originally, *Moral, Wille und Weltgestaltung, Wien*)
- [1934/1979] Uncertainty in economics, *Selected Papers in Logic and Foundations, Didactics, Economics*, Vienna Circle Collection 10, Dordrecht-Holland/ Boston-U.S.A, D. Reidel Publishing Company (originally, Unsicherheitsmoment in der Wertlehre in *Zeitschrift für Nationalökonomie*, 5)
 - [1936/1979] Remarks on the Law of Diminishing Returns; A Study in Meta- Economics, *ibid.* (originally, Bemerkungen zu den Ertragsgesetzen, *Zeitschrift für Nationalökonomie* VII, pp. 25-56)
 - [1938] An Exact Theory of Social Groups and Relations, *American Journal of Sociology* 43, pp. 790-798.
 - [1953/1979] On the grouping problems and related intelligence tests, (originally, in *American Journal of Educational Psychology*)
 - [1973] Austrian Marginalism and Mathematical Economics, Hicks and Weber (ed.), *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, Oxford: Clarendon.
 - [1979] *Selected Papers in Logic and Foundations, Didactics, Economics*, Vienna Circle Collection 10, Dordrecht-Holland/ Boston-U.S.A, D. Reidel Publishing Company.
 - [1982] Memories of Moritz Schlick, Gadol, -. (ed.) *Rationality and Science; A memorial volume for Moritz Schlick in celebration of the centennial of his birth*, Springer Verlag, Vienna.
 - [1983] On social groups and relations, *Mathematical Social Sciences* 6, pp. 13-25.
 - [1998] *Ergebnisse eines Mathematischen Kolloquiums*, Sigmund, K. and Dierker, E. (ed.), Springer, Wien/ New York.
 - The Papers of Carl Menger, 1840 - 1921 from the William R Perkins Library, Duke University, (Microfilm in Keio University in Tokyo), Part 2, Reel 32: Correspondence, Karl Menger 1914 - 1985.
- Mises, von L.
- [1922/1996] *Die Gemeinwirtschaft: Untersuchungen über den Sozialismus*, Jena, Verlag von Gustav Fischer, Faksimili-Ausgabe, Düsseldorf.
 - [1949] *Human action: A treatise on economics*, New Haven, Yale University Press.
- Morgenstern, Oskar
- [1928] *Wirtschaftsprognose; eine Untersuchung ihrer Voraussetzungen und Möglichkeiten*, Verlag von Julius Springer, Wien.
 - [1936/1976] Logistics and the Social Sciences, (trans. by Dori Intrator), *Logistik und Sozialwissenschaft, Zeitschrift für Nationalökonomie*, vol. 7, No. 1.
 - [1976] The collaboration between Oskar Morgenstern and John von Neumann on the theory of games, *Journal of Economic Literature* 14, pp. 805 - 816.
- and von Neumann, J.
- [1944/ 1957] *Theory of Games and Economic Behavior*, Princeton.
- Nakayama, C.
- [1997] The process of collaboration between Oskar Morgenstern and John von Neumann, *History of Economics Review*, No. 26, pp. 40 - 50.
 - [2001] An Investigation of Hayek's Criticism of Central Planning, *Economic Analysis and Political Economy in the Thought of Hayek*, (Aimar, T., Birner, J. ed.), Routledge, forthcoming.
- Punzo, L. F.
- [1989] Von Neumann and Karl Menger's Mathematical Colloquium, Dore. N. H. I.(ed.) *John von Neumann and modern economics*, Oxford, Oxford University Press.
 - [1991] The School of Mathematical Formalism and the Viennese Circle of Mathematical Economists, *Journal of History of Economic Thought* 13, Spring, pp. 1-18.
- Rellstab, U.
- [1992] *Ökonomie und Spiel; Die Entstehungsgeschichte der Spieltheorie aus dem Blickwinkel des Ökonomen Oskar Morgenstern*, Verlag Rüegger.

Salerno, J. T.

-[1990] Ludwig von Mises as social rationalist, *The Review of Austrian Economics*, vol. 4, pp. 26-54.

Schotter, A.

-[1974] Auctioning Böhm-Bawerk's horses, *International Journal of Game Theory* 3, pp. 195-215.

Shubik, M.

-[1982] *A Game-theoretical approach to political economy*, Massachusetts.

Sigmund, K.

-[1995] A philosopher's mathematician: Hans Hahn and the Vienna Circle, *The Mathematical Intelligencer* Vol. 17, No.5, pp. 16 - 29.

-[1998] Menger's Ergebnisse—a biographical introduction, in Menger [1998]

- [-], Exact Thought in a demented time; Karl Menger and his Viennese mathematical colloquium, unpublished paper.

Stadler, F.

-[1987/88] *Vertreibene Vernunft: Emigration und Exil österreichischer Wissenschaft*. 2 Bände, Wien-München, Jugend und Volk.

-[1997] *Ursprung, Entwicklung und Wirkung des Logischen Empirismus im Kontext*, Studien zum Wiener Kreis, Suhrkamp.

Stadler, F., and Weibel, P. (ed.)

-[1995] *Cultural Exodus from Austria*. Wien- New York, Springer Verlag.

Wittgenstein, L.

-[1922/1990] *Tractatus logico-philosophicus*, *Werkausgabe Band 1*, Suhrkamp, Frankfurt am Main.

-[1952/1990] *Philosophische Untersuchungen*, *Werkausgabe Band 1*, Suhrkamp, Frankfurt am Main.

(東京外国語大学大学院地域文化研究科助教授)

〈2000年7月11日 社会科学古典資料センター主催講演会 (於 本館特別応接室) 講演要旨〉